博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	小堀洋平
論　文　題　目	田山花袋の研究―作品の形成基盤および形成過程をめぐる考察―

審査要旨

請求者は、学部時代から研究対象を日本の自然主義文学者田山花袋とし、研究を積み重ねて来た。花袋研究は、いくつもの先駆的な研究があり、作品目録なども比較的整備されて来た文学者だが、いざていねいに見て行くと、初出が不明なものもあり、全集も完全ではなく、まだまだ検討すべき点が多い。請求者は、そうした研究の歴史を見据えつつ、従来見逃がされてきた点を発掘し、主要作品の検討においても、斬新な視点を提出、初期から大正期の代表作「時は過ぎゆく」に至る時期を視野に入れて、田山花袋の文学世界がどういった形成基盤から生まれたかを、たんねんに実証的に解明して来た。本論文は、その総決算として、「序章」から「終章」まで、十四編の論考によって構成され、主要部分は全三部に分けられている。その多くは査読のある学術雑誌に発表されたものであるが、いくつもの書き下ろし論考も吸収され、その努力は顕著である。

初期作品から、「重右衛門の最後」「蒲団」「一兵卒」「生」「妻」「田舎教師」「燈影」「時は過ぎゆく」に至る主要作品を、その形成過程に着目しながら分析する。花袋の作品には思った以上に外国文学の影も存在し、そのためにも花袋の文学的素養や読書体験、作品の形成過程は重要である。従来注意されなかった資料を発掘し、初出の特定をもしながら、作品のポイントを明らかにする姿勢は、多くの学術論文としてすでに学界に大きな示唆を与えている。

以下、各章の達成点を、まとめておきたい。

「序章　作家出発期において花袋が志向したもの―「『野試合』を読んで水蔭君に寄す」をめぐって―」は、従来花袋が硯友社に接近することから文学活動を始めたとされている通説に対し、これまでの著作年表に記載されなかった最初期の評論を跡づけ、逍遙や鷗外の美学の影響のもと「子どもの心情と肉親へ愛」の造型からその文学者の営為を出発させたことを論じている。

続く「第一部　初期花袋文学の形成基盤」では、これまであまり精緻な達成が見られなかった、一八九〇年代から一九〇〇年代初頭の花袋の文業を分析する。

「第一章　一八九〇年代の紀行文におけるジャンルの越境と人称の交替―『日光』を中心に―」は、花袋の『日光』の持つ、紀行文的性格と小説的性格の関係を、人称の面から分析した達成で、物語る「我」の位相の分析に特色が見られる。見逃がされている作品の発掘は、申請者の持ち味の一つで、高く評価されよう。

「第二章　一九〇〇年前後の花袋における「自然」の変容―太田玉茗宛書簡に見られる海外文学の受容を中心に―」は、早大図書館蔵の太田玉茗宛書簡を詳細に分析し、一八九九年の外国文学の読書体験の実態を発掘、花袋の「自然」概念が変容していくさまを、ていねいに辿っている。

次に置かれる「第二部　主題とモチーフの形成基盤」では、一九〇〇年代の代表作三作を対象とする。

「第三章　紀行文草稿「笠のかけ」について―『重右衛門の最後』論の一前提―」「第四章　『重右衛門の最後』における村と語り手―優位性とその隠蔽―」の二章は、論ずる評価軸が難しい「重右衛門の最後」をめぐって、早大図書館蔵自筆草稿「笠のかけ」をまず紹介、さらに作品の基本的対立構造を定位し、「事柄の意味」が「語り手の意図」へと変形されるさまを分析する。説明にやや明晰さが欠けるが、資料発掘も含み、果敢な挑戦と評価されよう。

「第五章　「見えざる力」から「蒲団」へ―岡田美千代宛書簡中の詩をめぐって―」「第六章　暴風・狂気・チェーホフ―「蒲団」執筆の背景とモチーフ―」「第七章　「蒲団」における二つの道―「破壊」と「犠牲」の相克―」の三章は、三章からなる「蒲団」論で、不可解な力による自我の破壊の実態を分析し、充実した内容となっている。「蒲団」執筆時に花袋がチェーホフの英訳短篇集に接していたことの実証から、作品の内実に迫る論調は、申請者の論理力を示した重厚な部分であろう。

氏名　小堀洋平

「第八章 「一兵卒」とガルシン「四日間」―「死」「戦争」「自然」をめぐる考察―」「第九章 「一兵卒」における「穴」の世界―その時空間をめぐる考察―」の二章は、「一兵卒」論として、時には比較文学的にモチーフを跡付け、時には「臭気」「死」「穴」のイメージを詳細に辿るなど、さまざまな工夫が見られる。

「第三部　描写方法の形成過程」の部分は、大正期までの作品の見取り図を提出した部分である。

「第十章　風景の腑瞰から自然との一致へ―「生」改稿をめぐって―」は、単行本刊行の際に削除された章の存在に着目、その理由を明確に提出して見事である。テクストの跡づけにおいて注意がよく払われており、示唆的な部分が多い。

「第十一章 「思想」と「生活」の交錯―「妻」改稿をめぐって―」は、単行本での改変を念頭に置きつつ、作品の生成が当時の花袋の平面描写論と関係することを解明する。

「第十二章　写すことと編むこととのあいだ―『田舎教師』における風景描写の形成―」は、作品の成立過程を検証し、当時花袋が雑誌に連載していた小品「文章月歴」に注目、そこに記された四季のイメージが作品に投影していると読む。写すことと編むことの間から作品の風景が立ち現われるとしたこと、「聞こえる」「見る」などの知覚動詞の生かし方の分析など、興味深い指摘が見られる。

「終章　花柳小説から『時は過ぎゆく』への展開―『燈影』の初出「春の名残」を中心に―」は、花柳小説の代表作『燈影』の、不明であった初出を発掘、その閉塞的心情が時代の閉塞状況と響き合うという視点を提出し、文学状況の視野をも念頭に置いた分析となっている。その中から、『時は過ぎゆく』に見られる「忍耐強い生の継続」の姿勢が花袋の達成である点、後半生の花袋文学へのパースペクティブを提示したまとめの章となっている。

以上各章の達成を確認して来たが、テクストの生成（初出・改稿など）や、執筆時の作者の置かれた状況の確認などの基礎調査をしっかり踏まえ、たんねんに同時代評や先行研究をたどり、花袋の置かれた位置、その作品の位相を考察する姿勢は手堅い。論者の方法は、田山花袋という文学者の性格を考察するのにふさわしい方法であり、単なる伝記研究や印象批評を超えて、近代文学の作品が生まれる現場に肉薄し、その秘められたドラマを見事に浮び出している。

ただ、申請者にとって、今後の課題として、初期作品の分析がもう少し欲しいこと、描写論との相関関係がもっと詳細に扱われる必要があること、先行研究の踏まえ方にやや問題が残ること、新しい研究方法である「生成論」の達成との差異を明確にすること、などが挙げられよう。主要作品のポイントをうまく扱ってはいるが、作品の全体性までしっかりと論じるには、もう少しの努力が欲しかった点もある。田山花袋の何を現在問題にして研究するか、の論者独自の問題認識が、もっと鮮明に出されてもよかった、ということもあろう。啄木との関わりなど、果敢な文学状況を見据えた問題提起も、更に説得力があることが望ましい。

このようないくつかの問題はあるものの、申請者の論文が、今日の花袋研究に新たな進展をもたらす、すぐれた達成であることは言うまでもない。よって、審査委員会は本論文が「博士（文学）」の学位授与に値するものと認定する。

公開審査会開催日	2015 年　2　月　1　日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏　名
主任審査委員	文学学術院・教授	博士（文学）早大	日本近代文学	中　島　国　彦
審査委員	文学学術院・教授		日本近代文学	高　橋　敏　夫
審査委員	政治経済学術院・教授		日本近代文学	宗　像　和　重
審査委員	文学学術院・教授	博士（文学）早大	日本近代文学	十重田　裕　一
審査委員	文学学術院・教授	博士（文学）早大	日本近代文学	鳥　羽　耕　史

審査委員　群馬県立女子大学・名誉教授　日本近代文学　渡　邉　正　彦